

第二期 第七十四号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 09. 20 定有堂書店 発行

本屋の「このもの性」

奈良 敏行

出セイカツ記

ワクサカソウヘイ

おぼけが育児用(イクジョー)

麻野 嘉史

SDGs 的観点による教育の再構成・脱構築を

岩田直樹

汽水のほとりから (18)

小原 修治

あまりに極私的な小説論

萩原 俊郎

深い学びをめぐる X

松田 裕史

ロシアとICM 戦争と数学

芝野 浩貴

くさりのようにつながって

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十三

内田 克彦

八代日記 (三十)

齊藤 仁昭

グリーク版「ペールギュント」の齎したもの

秦阜 梅林

私の問題意識 ナシヨナリズムと私

三浦 永理

おむすびおにぎり

あきの素生

待ちぼうけ観察記

ドラマメリア

…… 編集後記

本屋の「このもの性」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

以前、店頭でお客さんに教わった言葉に、「コナトウス」という概念があった。大事だよということだったが、よく理解できなくて他の何人かのお客さんにも尋ねてみた。結論はいまだ出ないが、そのうちなんとなく店内空間がそんな観念性に染まりだしてきた。

そのようにして本屋に観念性の移り変わりが訪れる。きっかけはふとした会話から始まる。そんな偶有性があった方が本屋は楽しい。

「なぜかわからないがこうしてしまう」、そのことをわたしはオブセッション(執着)と言い習わしてきた。わたしの解釈では、コナトウスとはこの執着なのだと思う。欲望と言い換えることもできる。

こんな本屋の観念性を反映するために、試しに二つの本を入り口として用意することとなった。(『持たない幸福論』と『目的なき人生を生きる』)

観念を日常性として生きよう、というのが久しく定有堂のテーマなのだが、常設の一冊に伊藤洋志『ナリワイをつくる』ちくま文庫がある。日常に観念を導入すると生き方はオルタナティブなものとなる。「ナリワイ」とは自分の生活の延長で無理をしないのできる小さな商売、とここでは定義される。しかし「ナリワイ」という言葉の先には観念を突き詰めた生き方がある。簡単・シンプルなものほどじつは観念性と深くかわる。夏のはじめに帰省し、立ち寄ってくれた、歌人のYさんと、「ナリワイ」が気になるという雑談をしていたら、この伊藤洋志と共著している「Daisaファ」さんも面白い人だよ、と教えてくれた。『フルサトをつくる』という本だった。この共著者(Daisa)は見落としていた。『持たない幸福論』幻冬舎文庫が面白かった。『京大卒の元ニートが提唱』と説明文にあった。京大にはかつて「吉田寮」というアナキーな寄宿寮があり、そこでの共同生活を、卒業してもつづけたい、というのが突き詰めた主張(コナトウス)だ。そういえば、『京大吉田寮』(草思社)という写真集も店頭のロングセラーだ。

この本と檣田の二つの中心のように、もう一冊、山内志朗『目的なき人生を生きる』(角川新書)を、大量にあちこちに並べている。このタイトルに惹かれこの著者の本は数多く読んだが、とても理解が及ばない。くり返し読む

ちに、言いたいことはこの新書に尽くされているのではないかと思うようになった。「形相性の中に目的はない」、「『目的が後から生まれる』」、「最初に存在していたものが最後に現れる」。これはコナトウスのことを言っているのだと気がついた。「欲望は原初形態において対象を持たない」というのが大きな結論だ。この欲望はコナトウスの別名である。これは大きな発想の転換だ。

「このものの性」というのもつかみどころのない言葉だが、コナトウスに執着し現動させようという意志かと思える。持たない幸福というのは、「中心を持たない存在」として生きることだ。中心を持たないために、「秩序」にからめとられないために、シンプルで簡単な生き方を選択する。

「このものの性」と「コナトウス」、わたしにはうまく説明できない言葉だが、この周辺をめぐって本屋の中を整えてみたい。ここ数日何人かの人に「本屋の中がすっきりしたね」と声をかけられる。物理的には何も変えていない。変わったのは観念性だけでも知れない。砂の動き、氷の割れる音、波の音、ざわめき、そんなつかの間の出来事、それも「このものの性」だと説明される。

所在なく本屋にふらりと踏み入る。とくに目的もなく棚から棚へと歩く。ふと我に返る瞬間が訪れる。一つの言葉との出会いもそんな出来事だ。我に返るとは正気づくくと

いうことだが、その対象が「われ」というのが面白い。「このものの性」、「コナトウス」がそこにあると言ってもいい。Piaさんは、「知識は人を自由にする」。本というのは「じぶんがぼんやりと気づきかけていることをはつきりと言葉にして教えてくれる」という。

わかりにくい本屋話になったが、生きる力は「秩序」の中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。そして本は人を「偶有性」（個体性）の肯定へ誘うものだと考える。そこに「小さな一冊の衝撃」がある。

2022.08.10

伊藤洋志『ナリワイをつくる 人生を盗まらない働き方』ちくま文庫 2017

伊藤洋志+Pha『フルサトをつくる 帰れば食うに困らない場所を持つ暮らし方』ちくま文庫 2018

pha『持たない幸福論 働きたくない、家族を作らない、お金に縛られない』幻冬舎文庫 2017

平林克己他『京大吉田寮』草思社 2019

山内志朗『目的なき人生を生きる』角川新書 2018

芳川泰久 堀千晶『ドウルース キーワード89 増補新版』せ

りか書房 2015

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

出セイカツ記

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

今年の十月中旬に新刊を出す。

タイトルは『出セイカツ記』（ただしタイトルはギリギリまで決まらないことが多いので、変わる可能性がある。出版業界あるあるです）。およそ四年をかけて書いた、三十代の私にとつての代表作ともいふべき一冊である。

それは冒険記だ。生活に不安を抱いた私が、どうにかして暮らしを楽にする方法はないかと、「衣食住」の観点から模索と実験のアドベンチャーを行う様が描かれている。時には石を売って「お金が生み出す不安」から逃れようと、時には魚突きをして「将来に食い詰めてしまうのではないか」という不安から脱出を図り、また時には自宅をジャングルにすることで「閉塞感から来る不安」を消そうとする。布団の中で一年間ほど「何もしない」という冒険まで実行し、その様を綴ったりもしている。この四年間、切実にぶぎけてきた私の有様が、そこには書いてある。手に取っ

ていただければ幸いである。

本書の編集担当は辻陽介氏。かつて、拙著『ぶぎける力』を手掛けてくれた名編集氏である。つまり『出セイカツ記』は、『ぶぎける力』を実践の書としてバージョンアップさせた一冊、と呼べるのかもしれない。パンデミック以降の「ぶぎける」についての論考も、そこには滲ませたつもりである。

私はこの新刊を、「ポンコツ時代の聖書」だと捉えてもいる。

気がつけば、やけに完璧めいたものばかりが溢れている世の中である。大量生産的なもの、高画質のツルツルとしたものが幅を利かせている世の中である。デジタルコンテンツはもはや世に蔓延しすぎて、手書き文字すら懐かしい昨今ではないか。だからこそ、私はポンコツなる概念がそろそろ逆襲を始めると睨んでいる。ポンコツの手触りの価値がそろそろ新鮮なものとして台頭すると予見している。ポンコツとはつまり、なんだか凸凹していたり、完璧じゃないんだけどそこが愛おしかったり、「お前これ昨日作ったろ」みたいなモノのことを指す。

四角四面のデジタルな情報記事よりも、セルフメイドの冒険記こそがこれから来るポンコツ時代にきつと合致することだろう。石を売り、魚を突き、布団の中でゴロゴロ

する。まさにそれはポンコツな生活者が綴った、ポンコツな生活誌だ。だから『出セйкаツ記』はこれからの時代の聖書になり得ると、私は自信を持ってここに宣言する。一億部は売りたい所存だ。もちろん、当てが外れていたとして、責任は持たない。

私はどんな仕事においても、そこにポンコツのトーンを少し流し込むようにしている。つまりそれは、温度のあるものを現わせるように心がけている、ということでもある。戦略と同時に勘を大事にしたり、責任と同時に無責任を重んじたり、判断と同時に様子を見ることを忘れないようにしたり。ツルツルさせない、凸凹させる、この意識によって来るべき大ポンコツ時代に備えている。

いや、ウソだ。べつにそこまで意識してポンコツを取り入れたりしていない。そうじゃなくて、どんなものを書いても作っても、なぜだかポンコツなものになってしまう自分がそこにいるだけだ。つまり私はナチュラルボーンのポンコツ人間なのだ。

ポンコツだから、あまり上手く生きることができなかった。生活不安を大きく抱えたまま、ここまで来た。だから私は、本筋から逸脱するように、ふざけるように、生きてきた。言ってしまうば、それは現実逃避の冒険旅行だ。その旅の中で、いくつかのお土産を手にした。そのお土産を

基にして書いたのが『出セйкаツ記』だ。

冒険を実践し、その記録を執筆しているうちに、コロナが現れた。不安の有様が大きく変わり、それでも私は冒険を止めなかった。そうして本書を書き上げた時、私の中に棲みついていた不安の化け物は、いつの間にか怪気炎をあげることをやめていた。そう、『出セйкаツ記』は少なくとも、私を救ったのである。

さて、あとは読者の皆様にお伺いをたてるだけだ。私は本書によって不安から脱出を果たした。世間の皆様は、本書によってどういう作用を得るだろうか。ゲラ直しが終わろうとしているいま、『出セйкаツ記』が皆さまの聖書になることを、祈るしかない私である。そう、祈るより他はない。なんたって、責任は持てないのである。

(編集部 注)

ワクサカソウヘイ『ふざける力』コア新書 2015

ワクサカソウヘイ『出セйкаツ記』(仮) 河出書房新社

2022. 10. 24 (予定)

おばけが育児用

イクジョー

麻野 嘉史

(ワイイ調査員)

「久々に音信不通に書きませんか」との音信をいただき、しばらく悩んだ。

最近では職場と家をぐるぐると回遊し、たまに家族で出かけては定食屋の尾頭付きエビフライの真ん中部分を子供に食べられて頭と尻尾をわびしくかじるような愉快な生活を営んでおり、文章を読んだり書いたりすることからすっかり離れている。果たして期待に添うものができらるうかと躊躇したが、折角のありがたいお誘いなので引き受けることとした。

といっても何の腹案もなかったわけではない。かつてウクライナやロシアに関わりのあるお化けについての本を自費出版(定有堂書店に絶賛委託中)したことに引っかけ、半年前から続く軍事侵攻についての所感めいたものを書くなどと考えていた。しかしいざ書く段になると、お化けのことを除いて当該二国に大した見識もない自分が戦争というあまりに巨大で複雑な厄介ごとに対して何を述べたものか考えあぐね、完全に手が止まってしまった。

かくなる上はなるべく卑近なことをあまりこだわらず書いてみよう、と開き直った結果が以下の文章である。

お化け好きである自分が子育てをするに当たって、密かな悩みがある。それはお化けについてどのような教育的スタンスをとるか、ということである。

そもそもお化けはいるのかいないのか。

「實在の有無はともかく心理や文化の反映として確かに存在はするしこうした背景を考えることが面白いのだ」と訴えたいところだが、私の説明が悪いのかどうにも3歳児はピンと来ていないようだった。

現在の一般常識に照らせばお化けなどというものは概ね迷信であり、「いない」とするのが穏当なところである。しかしそのスタンスを幼児に対しても貫こうとすれば、絵本をめくるとあちこちに出てくるお化けの説明に苦慮するし、後述するようにお化けというものは古今東西しつけないための子脅しに使われておりその効果は絶大であるため、安易に「そんなものはいない、寝ぼけた人が見間違えたのだ」と言い切ってしまうのも得策とは言えない。

では「お化けはいる」としたときに、そのお化けをどのようなものとして説明するか。前述のようにしつけない環としてお化けにご活躍いただくならば、やはり「お化け

は怖いものである」とすべきであろう。吉幾三も「いうことときかないわるいこは　よなかむかえにくるんだヨ」と歌っている。

なおお化けが来たりて何をするのかというと、柳田國男的には食べてしまう、せなけいこ的にはお化けの世界へ連れていく、あたりが想像される。いずれにせよ子供にとってはあまり嬉しくない事態であるので、一定の効果は期待できるのではないか。現に我が家の3歳児も「早く寝ないとお化けがくるよ」と言うとかかなり本気で怖がる（が、しばらくするとすっかり忘れてしまう）。

ただしこのスタンスの問題点は、子供がお化け嫌いになりかねないということである。無理にでも子供にお化けを好きになってほしい、という訳ではないが、お化け好きである私自身の言動で子供をお化け嫌いにしてしまうのはできる限り避けたい。

ならば逆に「お化けは楽しいものである」を強調するのはどうだろうか。なんか変な奴らが小豆を研いだり天井をなめたりと訳の分からないことを好き勝手にやっているのはどこことなく楽しそうであるし、おまけに古来歌われるように、お化けは死なないし病気もなんにもないと来ている。これならば子供もお化けを嫌いにならないはず、と意気込んだが、それではしつけの効果が無いのである。「早く寝

ないとお化けの世界に連れていかれちゃうよ」に対して「やったー、連れて行ってもらおうー」などと答えられてしまつては立つ瀬がない。

色々と考えた結果、差し当たっては「お化けは怖くないが人間と常識が違うため、夜中起きている子や人を困らせる子などは仲間だと思つて連れて行つてしまう」といった説明に落着いた。これならば過剰に嫌いになることもなく、一方で連れていかれるのは困るのでしつけにもなるのではないか。

お化けについてこの通り改めて説明していたら、3歳児のお化けを怖がる様子もなんとなく少し落ち着いたように見えた。そこでダメ押しとばかりに「お化けは楽しい」派の旗印ともいうべき水木しげるの妖怪図鑑を一緒に読み、個々のお化けを詳細に解説することで闇雲な恐怖心を更に減退させ、あわよくばお化けへの興味を持たせようとしたところ、水木の描く妖怪の迫力のある姿と細密な背景に説得力がありすぎたらしく「お化け怖いーこの絵本読まないで!」と強力な抵抗を示すようになってしまった。

ことほど左様に子育てとはままならない。お化けと子供と私の適切な距離をめぐり、もうしばらくは頭を悩ませることになりそうである。

SDGs 的観点による教育の再構成・脱構築を

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

職業柄、社会に出る前の若い世代と日常的に接している。業務の一つに高大連携教育があり、県内外の高校へ直接出向くかオンラインで学生、教員と話す機会が多い。

私の勤務先は二一世紀最初の年に環境倫理学の第一人者・加藤尚武氏(定有堂書店で二〇〇三年に講演会開催)を初代学長に迎えて開学したこともあり、大学紹介(環境学部、経営学部)を兼ねてSDGsの話をする。

高校生に伝えている内容の骨子は次のとおりである。時間的制約がありフルバージョンとはいかないが、「環境学なくして経営学なし」を基本コンセプトに据えている。

一 グローバル・ルールとしてのSDGs

二〇二〇年九月に刊行されて以来、売上数が四五万部を超えた一般向けの経済思想書がある。斎藤幸平『人新世の「資本論」』(集英社新書)である。斎藤の主張は、「マルクスは、資本主義の辛い現実が引き起こす苦悩を和らげる「宗教」を「大衆のアヘン」だと批判した。SDGsはまさに現代版「大衆のアヘン」である。」に集約される。

彼は帝国型生活様式を否定し、脱成長、脱資本主義を語る。しかし、理想へ到達するための具体的な道筋は一向に見えてこない。方法論が示されなければ、どんなにすばらしい理論でも「絵に描いた餅」に過ぎない。

斎藤が評するように、SDGs(持続可能な開発目標)は現代世界が抱える根源的な諸問題を人々の視野から隠すための「まやかし」なのか。

二〇一五年九月一五日の国連総会で一九三すべての加盟国が賛同したSDGsには三つの基本的観点がある。①世界から貧困をなくすことと、現代の「つつかない(持続不能な)社会・経済・環境」を「つづく(持続可能な)社会・経済・環境」へと変革することを柱とする目標。②二〇三〇年を期限として、一七のゴール、一六九のターゲット、二二二の指標により、世界の社会・経済・環境のあらゆる課題をとりまとめる相互に不可分一体の目標。③条約のように国連加盟国を法的に縛るものではないが、先進国、新興国、途上国がともに取り組むものであり、実現にあたっては「誰一人取り残さない」ことが謳われている目標。(南博・稲場雅紀『SDGs』岩波新書、二〇二〇年)

晩期マルクスの環境思想、「脱成長コミュニズム」を発掘した斎藤の国際的業績(『大洪水の前に―マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版、二〇一九年、参照)は率直

に認めよう。しかし、二・三・三の指標に沿って対策を講じ、現在世代だけでなく未来世代の誰一人取り残さないことを目的とするSDGsは、決して斎藤が主張するような「大衆のアヘン」ではない。SDGsは万能薬でも特効薬でもないが、世界共通の政治的・経済的・社会的・倫理的なルールであると言えよう。

二 ESG投資の現在と日本政府の動き

二、三年ほど前から、私が出会う企業人たちのスーツの襟元にSDGsバッジが目立つようになってきた。何人かに「何のためにつけているのか」と尋ねると、「融資がスムーズに行われるため」とのこと。その頃からESG投資に関する報道が数多くなされるようになってきた。

環境Environment、社会Society、統治Governanceの

頭文字を冠したESG投資は、最新統計（二〇二一年七月）によれば、世界の資産運用総額の三五・九%、一ドル一三五円換算で約四八〇〇兆円となっている。日本のGDPの約八倍であり、過去五年間で一・五五倍に増加している。従来の投資は、企業の財務情報に基づく短期的中期的な視点でなされていたのに対して、これからの投資は環境や社会に配慮する長期的な視点に立たなければならぬ。ESG投資はSDGs実現のための有効な手段である。

福島第一原発事故以降、グリーン経済への切り替えが盛んに提唱されてきた。民間企業に比べ日本政府の動きはあまりに遅く、ようやく事故後一〇年以上も経ってから、岸田首相が記者会見（七月一日）で公式に政府方針を打ち出した。

三 長期的観点による教育の再構成・脱構築を

SDGsは「四方よし」の実現である。売り手、買い手、世間をそれぞれ自己の利益、他者の利益、社会（世界）の利益と読み換え、「三方よし」（近江商人の言葉、ビジネスの「いろは」）に「未来よし」を補えば、「四方よし」はSDGsの理念そのものになる（蟹江憲史『SDGs』中公新書、二〇二〇年）

アメリカのグリーン・ニューディールGND、EUのグリーン・ディールGD、日本のグリーン・トランスフォーメーションGXなど、世界中で政治的・経済的・社会的・倫理的な新しい挑戦が始まっている。

人生二〇〇年時代、現役高校生・大学生のうち一定数が二世紀を生きることが確実である。長い二一世紀を生き抜く若い世代のために、近視眼的になりがちな教育を、長期的観点に立つて再構成・脱構築することは喫緊の課題であろう。

汽水のほとりから（18）

小原 修治

（県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住）

八月や六日九日十五日―お盆前に日本海新聞の海潮音でこんな句を見かけた。コラムの冒頭には、「77年目の夏、沖縄本土復帰50年、ロシアのウクライナ侵攻と平和について考える特別な夏となった」とあるが、同感である。ロシアだけではない。八月に入ると、中国が米政府要人の台湾訪問に反発し、大規模な軍事演習を行なったという報道があった。インドネシアのバリ島で開催されていたG20外相会議では、中国とロシアの両外相が記者会見を開き、両国の関係の強靱性と戦略的決意を示したという。今や中ロ両国は隣国への侵略を厭わない悪の枢軸である。

とはいえ、ロシアとウクライナ、中国と台湾との関係は、今に始まったものではない。統治・被統治の複雑な歴史と西側諸国の介入という点で、両者の構造は似ているのだ。だから、歴史的に縁もゆかりも無い国へ攻め込んだ欧米や

日本のような帝国主義的な戦争と自分たちのそれとは似て非なるものだと、中ロ両国は思っているように思う。中国へ侵攻したことのある日本は、今度は逆に中国に日本が侵攻されると怖れているのかもしれないが、大義名分が無ければ戦争など出来ないものだ。だから、中国にとつて大義名分のある台湾侵攻は今後十分に可能性があつても、大義名分のない日本侵攻は空想の産物に過ぎないはずだ。

けれども、台湾有事は日本有事とばかりに日本が軍備を増強し、自衛隊が米軍と共に作戦を遂行し続けるならば、事情は違つて来る。自衛隊は勿論、米軍だけでも中国軍と軍事的に衝突することになれば、かえつて中国に日本侵攻の大義名分を与えることになってしまうからだ。しかも、そうなつた場合、米軍が最後まで日本を守るといふ保障は無い。もっとも米国は、ウクライナに武器は供与しても、軍隊は派遣しておらず、ロシアとの全面戦争を避けているから、台湾有事の場合も同様の行動を取るかもしれない。が、それを決めるのはあくまでも米国である。国の命運を左右する重大な決定を日本は主体的に出来ないのである。

この危険な状態を日本が主体的かつ戦略的に回避する恐らく唯一の方法は、現行の憲法九条を楯に日本は軍隊を海外へ派遣できないと米国に対して主張することだろう。実際、朝鮮戦争やベトナム戦争では、日本はそう主張する

ことで戦争当事国となるのを回避することが出来た。が、それは残念ながら過去の話だ。七年前に違憲を疑われつつ集団的自衛権の行使が認められた以上、この主張はもはや通るまい。それどころか、政府は憲法改正を目標に掲げ、その急先鋒として集団的自衛権の行使容認に貢献した故安倍元総理を国葬し、米国にアピールしようとしている。

もつとも、『中学生から知りたい ウクライナのこと』（ミシマ社）の中で著者の藤原辰史は、「日本はすでに、ウクライナで起こっていることの当事者である」と述べ、日本は戦争当事国であるとの認識を示している。確かに、岸田内閣はロシアに対する西側諸国の経済制裁に加わり、その結果、日本はロシアから非友好国に認定され、報復も受けている。原油の高騰など、国民生活に影響があるのは、ロシアと戦っているからなのだ。台湾有事が起きた際も、今度は中国との間に同じことを繰り返すつもりだろうか。今年の日中国交正常化50周年の記念すべき年である。半世紀前、鳥取県古井喜實をはじめとする先人の努力が実を結び、周恩来と田中角栄が日中共同声明に調印したのが9月29日。出来れば今年中に日中首脳会談を実現させ、未来志向の両国関係を探るべきだったが、恐らく年内には無理だろう。ちなみに、米国が中国と国交を結んだのは、日中国交正常化の六年も後のことだった。当時の日本は、

米国に伺いを立てることなく、中国と独力で国交を開き、親密な関係を築いて行こうという機運があったのである。

ところで、大義名分が無ければ戦争など出来ないとい先に述べたが、それは縁もゆかりも無い国々へ攻め込んだ戦前の日本についても同様だった。当時の日本の大義名分は、「大東亜共栄圏の建設」である。日本軍を海外へ派遣し、アジア諸国を欧米の植民地状態から解放し、アジア民族が共に栄えるという理想を掲げたが、実際にはアジア諸国の資源を利用する国策だった。当初は歓迎の声もあったが、すぐに日本の横暴なやり方に非難の声が上がったという。

日本の近代150年は、アジアの人々に対する差別の歴史でもある。しかも、それは現在もまだ続いていると言える。その意味で、以前から気になっていた外国人技能実習制度の年内の見直しを政府が決定したのは、最近の暗い世相にあって、良いニュースだった。「大東亜共栄圏の建設」という思想は、孫文も説いた「大アジア主義」に通じるもので、それ自体悪いものではない。アジアを差別視し続ける日本には特に必要な思想だ。日本の将来を占う生命線は、ロシア・中国・北朝鮮も加えたアジア諸国との外交にある。

あまりに極私的な小説論

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

元いた新聞社の先輩から頼まれて、地元文芸誌の小説部門の審査員というものを、つい引き受けてしまった。高校時代、二股 三股していた部活のうち文芸部で「短編小説らしきもの」を遊び半分に二、三書いたことはあるが、その後、小説など一度も書いたことがない。今思えばわが高校の文芸部はそこそこレベルが高く、学研コース文学賞に短編『失透』で入選したH君はのちに本物の小説家になった（今は彼の妹の方が有名だが）。

それにしても、安請け合いにもほどがある。引き受けたことを忘れかけた頃、ゆうパックでどっさり応募作品が送られてきた。さあ、どう責任を取るつもりだ。

実は最近、図書館で少し困っている。退職してからは、それこそ朝から晩まで有り余る時間を読書三昧で過ごす、

と思っていた。お金もかからないし。

確かに当初は、あまりの大作で在職中は手が出せずにいた中国のSF作家・劉慈欣の『三体』を借りて（オバマ元大統領が大ファンで第三部の発売が待ちきれず、劉慈欣氏に何度も催促のメールを送ったが、劉氏はまさかホワイットハウスからのメールとは思わずスパムメールとしてゴミ箱に入れていたという）、三日三晩ぶつ通しで読んだりしたが、途中、作者が描く女性が多量にステレオタイプ（男に都合のいい女）なのが鼻につき、宇宙をまたにかけた壮大なドラマが急に薄っぺらいものになってしまった。無駄な時間を過ごした気がした。

その後、いくつか別の小説にチャレンジしてみたのだが、どれも「そんなことないよな」「ちよっと都合が好すぎる」などと思ってしまう（あのH君の妹が書いた小説も）、最後まで読み切れない。唯一例外だったのは藤沢周平の時代小説だけだった。

そうこうしているうちに、「どうせ時間の無駄になる」と小説を手にする気が完全に失せてしまい、最近借りるのはノンフィクションやエッセー、ライフスタイルや建築に関する本や歴史本ばかり。

こんなことを書いてみると、この文を目にした人の中

に応募者がいて「よくそんなヤツに小説の審査員を頼んだものだ」と怒り心頭に発するかも知れない。

幸いなことに審査員はもう一人いる。そこで、選考に際して、まだお会いしたことがないその方にメールした。

「私は文章をなりわいにしてきたとはいえ、事実を追う新聞記者でしたので、小説の審査などする資格はないのかも知れません。ただ、言い古された言葉ですが、仕事の中で『事実は小説より奇なり』という事例に本当に数多く出会ったので、いくつか審査する上で基準を設けて読み進めました。

①リアルを語る小説ならば、きちんとした世界観が構築されていること。現実には、まさかと思えること、予想外の出来事がありますが、それでも現実には、取材するにつれ、いろいろな事象が絡んで結果的に「起こるべくして起こった」と納得できる「リアリティ」が浮かんできます。しかし作者の頭の中で想像した世界にはえてして独りよがりな展開——「それはないだろう」とか「ストーリーに少々無理がある」と思えるものが散見されます。

②一方、ファンタジーを追う小説ならば、その夢や理想をきちんと描いているか。先ほどの判断基準とは正反対ですが、現実のわが身を描く小説もあれば、逆に創造力や時に幻想や夢もまじえて「ここにはありえない世界」を描く

のもまた小説の役割としますので、その創造の豊かさや着想を判断しました。

③最後に、ことばのリズム感や文章のこなれ感」

で、最近になってメールの相手がどんな方か分かった。

足立悦男島根大名名誉教授、国語教育学者にして教育学博士。著書に『現代日本文学の旗手たち』（深水社）。まさに釈迦に説法、私は身のほど知らずを絵に描いたようなメールを送ってしまったのだ。ああ、恥ずかしい。



しばらくして足立先生から「ストレートな批評に萩原さんの小説観がよく現れています。審査基準3点にも共感しました」という返信のメールをいただいた。選考結果も先生とほぼ同じで、ほっと胸をなでおろした。

応募者は私と同世代が多いらしく、「老い」「死」「病氣」「別れ」といった内容に少々気が滅入ったものの、彼らがPCに向き合い、報いもそれほどない応募小説になぜかくも格闘したのか、行間から伝わってくる気がして、あの意味、私は小説というものを少し好きになった。

深い学びをめぐつて X

松田 裕史

(高校教員)

今夏は英語授業研究会の主催する第三三回全国大会の分科会で実践発表する機会をいただいた(八月一二日)。この大会では昨年に続いた発表となる。今年もオンライン開催であるのが残念であったが、二日間でおおよそ三〇〜四〇名が発表し、資料集は一二四ページにも及ぶ。今年もやはり西側の発表者が少なく、最西は鳥取の僕であった。各発表者の発表タイトルを眺めるだけでも今の英語教育をめぐるトレンドが分かる。英語教育という枠組みを超えて、日本でどういう言語教育が目指されているかという視点から見ても示唆を得ることができる。以下のようなキーワードが特に目についた。

「思考力・判断力・表現力」 「GIGAスクール」 「ICT」
「新学習指導要領」 「評価」 「生きて働く文法指導」 「動機づけ」 「主体的な学び」 「やりとり」 「CLIL」 「深い思考」 「小学校外国語科」 「SDGs」 「学習者の自律性」

「批判的思考力」 「読解ストラタジー」 「自己関連性」
「5ラウンドシステム」

僕と言えば、昨年やった授業を素材として「英語表現Ⅰ(3年)における文理融合・教科横断的授業実践」というタイトルで発表した。発表後の質疑応答では安木真一先生(京都外国語大学)から質問があった。いわゆる「深い学び」は評価しないといけないものなのか、評価するとすればどのように評価すればよいかという内容だった。評価するとすれば、生徒の質的変容の見取りは必須になる。量的にも変化を見取れるが、それだけだと味気ない。質と量を両方組み合わせて評価も厚みを持たせたいが、このあたりはもう少し自分なりの研究が必要だと感じた。それが分かっただけでも発表した甲斐があった。

評価と言えば、英語教育において文科省が依って立つ評価枠はCEFRである。CEFRとは外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠であり、言語の枠や国境を越えて、外国語の運用能力を同一の基準で測ることが出来る国際標準である。日本で行われる英語の資格試験の評価基準・規準はCEFRと連動するようになっており、およそ英語教育に携わる指導者は小学校から大学まで、CEFRを金科玉条のように見立てている。かく言う僕も、CEFRそのものを疑ったことはない。疑義を呈する研究者の発

言を聞いたことはあるが、ではその先をどうすればよいか
見えてこなかったたので聞いたこと自体も忘れていた。

大会二日目の最初のプログラムは高等学校の実践発表か
らはじまった。コメンテーターの高橋一幸先生(神奈川大
学)はCEFRなど、日本とは学習環境のまったく異なる外
国の理論や指導法を流行に乗って安易に直輸入するのは甚
だ危険だと言われていた。プリントには次のようなことも
書かれている。「CEFRの原形は一九七七年まで遡ること
ができ、元々ESL環境のヨーロッパの成人を対象としたも
のである。少人数クラスの個別対応指導が基本なうえに、
彼ら彼女らは外国語の初学者であつても、ある程度の運用
能力は持つており、EFL環境での初学者である日本の児
童生徒とは、言語接触経験と運用能力が根本的に異なる。」
これは、文科省に対する、学術的に裏付けのある論理的な、
痛烈な批判である。現場の教員としてはこれを肝に銘じて
おかねばと思う。最近、文科省から新学習指導要領に沿っ
た言語活動の模範例が次々と紹介されてくる。それはそれ
で有難いのはあるが、活動内容に何となく上滑り感を感じ
ていた。その原因の一つは、おそらく文科省がもともと
依拠している考え方(ここで言えばCEFR)が日本の言語
環境にフィットしていないからだろう。

二日間を通じて、様々な最新の指導技術や精緻にデータ

分析を行つて手法の妥当性を証明する研究がいくつもあつ
た(安木先生は別のソースで、どこに行つても三観点の
評価と「C」の使用法のオンパレードだと嘆いておられた。
)しかし、印象に残つたのは高橋先生の前提や起源そのもの
を疑つてみる批評的態度と和田玲先生の毎日のノート
チェックだった。和田先生は今春、『外国語学習者エンゲ
ージメント』という翻訳書を上梓された順天中学高校の先生
であるが、毎日、八〇冊の英語課題ノートをチェックして
いるという。課題内容は生徒が自分で決める。チェックす
るのに一人五秒だとすると一〇分足らずで完了するが、一
週間で五〇分、一か月だと二〇〇分はそれに時間を費やす
ことになる。データ、エビデンス、評価、「C」とも関係な
く、目に見えて急激に模試の成績や進学実績が上昇するわ
けでもないことは軽視されがちだ。でも、CEFRのレベル
だとあなたの英語力はどうか、観点別にあなたの学力
を判断するところだと連呼したところで生徒を関与・参加・
没入させる(エンゲージ)ことはできない。エンゲージメ
ントに通曉されている和田先生が日々、何をされているか。
そこから学ぶべきことは多い。

ロシアとICM　戦争と数学

芝野 浩貴　（地球探究家）

アインシュタインは、「今の文明においてもっとも大切な事柄を一番意見を交換したい相手と書簡を交わしてください」と国際連盟に頼まれた時、戦争についてフロイトとやりとりした。その時の本が「ひとはなぜ戦争をするのか」である。もし、コロナ禍でなく、ウクライナ侵攻が始まらなかったら、私は7月6日から14日までロシアのサンクトペテルブルクで開催のICMに参加していたのだが…

「ウクライナ・オン・ファイヤー」でオリバー・ストーンが取り上げた「マイダン革命」が2014年。もし、ウクライナ侵攻がなければ、ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の2作品が日本で上映されることはなかっただろう。「リフレクション」では、ウクライナの従軍医師が捕虜から帰還してトラウマに苦しむ姿を映し、「アトランティス」では、2025年の戦争後の未来を家族と友人を亡くした元兵士のトラウマを通して映し出した。いずれも台詞が少なく静かな映像の長回しであるが、今現在では廃墟となった街の撮影なので預言的な映画で生々しく言葉が出ない。その～本の前に「ナワリヌイ」のドキュメンタリーも観た。ナワリヌイ

はロシアとウクライナの双方に出自をもつ。現在獄中にいるナワリヌイが進歩党を立ち上げたのも2014年。教員になってからの教科研究の命綱はICM(国際数学者会議)であった。ICM(数学教育世界会議)がオリンピックの年に開催されるのに対し、ICMはワールドカップの年に開催される。つまり4年に一度の開催である。教員時代は33日学校に住んでいたが、例外としてICMには参加し続けた。教員引退してからは参加を見合わせていたので2014年、2018年は参加していない。2014年は女性初のフィールズ賞を受賞したマリ・アム・ミルザハニ(イラン人、40歳で病死、業績は、リーマン面とモジュライ空間の力学と幾何学について。)に話題は集まった。2018年は柏原正樹教授がチャーン賞を受賞した。ガウス賞にしろ、チャーン賞にしろ、創設までの経緯を知り、受賞の様子を目の当たりにしてきたので、その価値はわかっているつもりだが、2022年ICMでは、MARK BRAVERMANがABACUS MEDALを‘information complexity’で受賞した時、思考が止まった。何の賞だ?と。調べてみると、これまでのネヴァリンナ賞(アルゴリズム解析・パターン認識・数理最適化などの計算科学に重きを置いている)の改名であった。改名理由は、ネヴァリンナが第二次世界大戦中にフィンランドのナチ親衛隊の代表として活動していたからだそうだ。

冒頭で、ロシアでのICMに参加するはずだったと述べた

が、ウクライナ侵攻が始まったので、本来の開催地のサンクトペテルブルクからフィンランドのヘルシンキに変更された。数学者数百名の反対運動の結果であった。更にICM史上初のバーチャル会議となったので、私も国内にいなから参加できた。9日間の会議中に200本を超えるレクチャーが行われた。私はICMに参加し続けたおかげで、これまでに200ヶ国の人と話す機会に恵まれた。数学を語るのに国境は関係ないのである。残念ながら今回は直接参加者と話せなかったが、講義録は映像に残っているので多くのプレゼンを聴くことができた。日本が騒然としていた「あの期間中」の時である。発表者の女性の割合が増えていたことに驚いた。紙面の都合で、ここでは4名のフィールズ賞受賞者の特徴を簡条書きで記して閉じたい。

① JUNE HUH・ホ・ジュニ(韓国系数学者では初の受賞。ソウル大学では広中平祐の指導を受けた。代数幾何を利用した組合せ論が専門。講演タイトル「combinatorics and hodge theory」 「自分が菌類の巨大なネットワークの中のキノコに感じる。数学的発見の源は多くの人と関わること」)

② HUGO DUMINIL (ユーゴー・ドウミニニコパン) 相転移の確率論が専門。講演タイトル「Ising model」 「ミスは大事なクリエイティブに向かう要素。数学の美しさや楽しさも

多くの人々が触れられるようにすべきだ」

③ JAMES MAYNARD (ジェイムズ・メイナード) 素数の出現。パターンの解明。講演タイトル「counting primes」 「数論は単純でもあらゆる分野に繋がる。数学は計算でなくアイディアである」

④ MARYNA VIZOVSKA (マリナ・ビャゾースカ) ケプラー予想の発展で、8次元(25.37%)と24次元(0.193%)の球充填問題解決。(3次元の球充填は化学で既習の六方最密や面心立方格子の74.05%) 講演タイトル「magic functions illuminate the mysteries of extremal geometry」

public outreach(大衆普及)に貢献した人に送られる
LEELAVATI PRIZEを受賞したのはロシアのNIKOLAI ANDREEV。
④のビャゾースカはミルザハニに次いで女性で2番目のフィールズ賞受賞者となったが、ウクライナ人でキエフ出身。ウクライナ侵攻の初日の砲撃で教え子の若手女性数学者を失ったからのレクチャーとなった。本来の開催地のサンクトペテルブルクはプーチンだけでなく、ポアンカレ予想を解決したペレルマンの故郷でもある。数学を蔑ろにする国に、もはやペレルマンはいないだろう。

ムソルグスキーの「展覧会の絵」はパリ、ローマのあとキエフの大門で終わる、モスクワでもサンクトペテルブルクでもない。

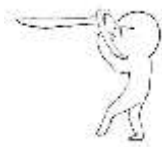
定有堂教室「読む会」

（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示



太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員



くさりのようにつながって

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

子供向け語学絵本の山と格闘していた折、『お金の旅』(仮題)というのがあった。造幣局で打ち出されたコインが、銀行↓商店↓客と移動し、客↓商店↓銀行に戻る。汚れて擦り減ったコインは、再び造幣局に集められ、鑄直されて新たなコインに生まれ変わる、という社会の仕組みを教える他愛のないものだ。

同じ山の中に、『しあわせハンス』もあった。グリム童話である。長年の奉公を終えたハンスは、主から大きな金塊で給金を貰い、喜び勇んで故郷を目指す。その道中、様々な人物と出会い、互いの持ち物を交換していく。金塊は馬になり、馬は牛になり、牛は豚に、豚は鷲鳥に、鷲鳥は砥石に、その砥石さえうっかり井戸に落として、とうとう無一物に。しかし、彼は(文字どおり)重荷がなくなつたことを喜び、我が身の幸せを神様に感謝した、という教訓話である。

「わらしべ長者」の国の民としては、「めでたいハンス」「ハンスのばか」とでも言いたくなる所だが、そこはそれ新教の国のお話。地上の富を追うなかれ、天に宝を積むべし、というイエスの教えを反映している訳だ。受くるより与えるが幸いなり。ワイルドの『幸福の王子』やO・ヘンリーの「賢者の贈り物」も同工だ。

ひとつの結果が、次の出来事の原因になり、玉突きのように話が繋がって行く、こういう作品を形容する言葉があるのかどうか、「わらしべ」をモチーフにしたミステリは米澤穂信が書いている。都筑道夫や星新一も同じようなスタイルの話を書いていたように思う。トリッキーな作風の作家なら、一度は試してみたいくなる形式だろう。

海外作品で思い当たるのはシュニッツラーの『輪舞』である。登場人物の相手だけが次々に入れ替わって行く趣向の戯曲で、第一景はAとB、第二景はBとC、第三景はCとD、という具合に替わって、最後にJがAと一緒に成って円環が閉じるという、ダンスのパートナー・チェンジになぞらえた話である。

この種の遊戲に、尻取唄というのがある。小学校の国語で習ったものだが、要するに連の最後の言葉が次の連の最初の言葉になる、という子供の遊びだ。

最も人口に膾炙しているのは「さよなら三角」だろう。この題名の漫画がヒットしたことがあつたけれど、今の子供には何のことやら分かるまい。

全国的に広まっについて、様々な地方ヴァージョンが存在する。筆者が教わった鳥取県中部版は、

さよなら三角　また来て四角

四角は豆腐　豆腐は白い

白いは兎　兎は跳ねる

跳ねるは蛙　蛙は青い

青いは根深　根深は長い

長い煙突　煙突は黒い

黒いは印度人　印度人は強い

強い金太郎　金太郎は赤い

あかいは電気　電気は光る

と続いて、「光るは親父の禿げ頭」で終わる。「根深」（ネギ）とか、「電気」（電球）とか「赤い」と「明るい」

が同音で発音されるとか、この地域らしさが出ていた。北原白秋の『日本伝承童謡集成』によれば、「兎」までは、北から南までほぼ全国共通である。その後が、近畿以东は「蚤」、以西が「蛙」になる。蚤だから色は「赤」で、その先のストーリーが変わって行く。西の方になると、かなり下世話な展開を見せるものがある一方、中部辺りでは最後の連が「北がなければ三角だ」で終わるものがあり、これなど冒頭の「さよなら三角」に呼応していて、めでたく円環を成す。子供の戯れ歌といえども侮れない。

誰に教わったか（例の社会科教師だったかも）忘れてしまったが「クロパトキン、き〇〇ま」という印象的な（一）フレーズの童歌もあった。種村季弘辺りも書いていたように思う。『集成』には事例がないので、ネットで調べてみると、「乃木さんが」で始まる、日露戦争後に歌われ出した歌らしい。「マカロフ」「ロシヤ」「シベリヤ鉄道」などが読み込まれたヴァージョンも存在するようだ。

※表題は「ロコモーション」の訳詩（あらかわひろし）による。

鳥取あれこれ その七十三

内田 克彦（地域研究家）

三木露風作詞、岡野貞一作曲の「霜の朝」という曲がある。一九三〇（昭和五）年十一月、出版社の寶文館から発行の『新日本小學唱歌 第二輯』に掲載されている。なぜ二人がコンビとなって曲を作ったのかは不明である。但し、『三木露風全集』には、「霜の朝」の詩は載っていない。

ところが、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二卷』を見ると、同じころに東京音楽学校で新しい「青年男女ノ歌フニ適スル歌曲集」の編纂の動きがあり、その編纂綴りに、委員に選任された岡野と、露風との関わりが記述されていた。

『百年史』には、「昭和五年一月起 唱歌編纂掛記録」、「昭和五年四月 唱歌編纂掛 作曲部記事」及び「唱歌編纂に関する控 昭和五年八月」と題する綴りから活字化して転載しており、その中の二人に関係する事柄についてのみ抜粋する。

まず、岡野は、早くも二月十八日には、西條八十作詞の「月と母」の作曲が決まっている。

次いで、五月十三日には「朝」 岡野氏〔略〕三木露風詩」とある（「唱歌編纂掛 作曲部記事」）。

因みに、「歌詞選定ノ方法ハ作曲ニアタル委員達ニ於テ、各々ソノ詩人ノ原著ニ就キテ、コレナラバ作曲可能ナリト認ムルモノヲ選定スルコト」とあり、委員の誰かが露風の詩を選定したのだろう。

『三木露風全集』から「朝」を探すと、『第一卷』の「青き樹かげ」の中に、次のとおり載っていた。

朝

霧はれてゆく遠近へをちこちに

黄金へがねの村はあからみぬ。

和へやはらぐ声はおこりきて

谿の底よりたちのぼる。

きらめく露は日をむかへ

今日あらたなる幸を吸ふ。

そして、七月八日には「春の草 三木露風〔略〕岡野」とある（「作曲部記事」）。これも同じく「青き樹かげ」の中に、次のとおり載っていた（但し、「二〇四」を省略）。

春の草

一

萌へも えよ 萌えよ 春の草

生ひよ 生ひよ 野辺の草

あたらし夢をはぐくみて

春の生命へいのちをのばせかし。

さらに、九月十九日には、次の記述が出てくる。

新作依頼ノ目的ト既作歌詞使用了解ヲ求ムルタメニ北原
白秋、西條八十、白鳥省吾、三木露風、濱田廣介氏ヲ訪
問スルコトトス 新作ニ対シ金五十圓ヲ謝儀トシ旧作ハ
使用許可ヲ無償ニテ求ムルヲ原則トスルコト

そして、十月二十六日に「三木露風氏ヨリ「我等の精神」
到着」とあり、十一月十一日には「過般 作詞者 三木露
風、白鳥省吾氏訪問につき作者側意見を報告 更に修正案
を具して作詞者を訪問することに決す」、同月十四日には
「三木露風氏を訪ひ修正意見の了解を得、謝金金五十圓を
交附し「我等の精神」の著作権の譲渡を受けた」とある。
しかしながら、著作権の譲渡のためであろうか、『三木露
風全集』を探しても、「我等の精神」の詩は見当たらない。

ところで、十一月七日には「今日マデ集蒐「ママ」作曲
セシ歌曲を「ママ」約十篇選出編輯第一輯トシテ発表スル
コトニ決定。」とある。

ネットで検索すると、三枝まり「東京音楽学校における
『新歌曲』（1931）編纂」論文が見つかった。そこでは、「東京音楽学校が出版した唯一の唱歌集」であり、「結局編纂されたのは第1輯のみであった」「『新歌曲』に載る全一〇曲が紹介されており、西條八十作詞、岡野貞一作曲の「月と母」が載っていた。

十二月五日には「本日 春の草（三木露風作歌 岡野氏作曲）「略」を配布す」とあり、編纂作業が続けられていたようであるが、残念ながら転載はここで終わっている。

露風作詞、岡野作曲のコンビによる作品「朝」及び「春の草」と露風の詩「我等の精神」が東京藝術大学音楽学部大学史史料室に残されていないかと、わらべ館を通じて照会してもらったが、何もない、とのことであった。

八代日記

(三十)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

八月某日

ジャンプ・コミックス『D・スランプ』を衝動買いしてしまった。第1巻の初版は1980年8月14日(40年以上経っている!)、購入したものは2022年3月6日の93刷との記載。まだ刷っていたのか。すばらしい。(最終第18巻は1985年5月15日初版、2021年10月6日第54刷とある。)

それならば『魁!!男塾』とか『聖闘士星矢』も新書サイズで読み直したいなと探してみたが、どうももうないようだ。アラレちゃん強し。ペンギン村の群像劇は自分も村に住んでいるような(あの一種のユートピアに住みたいだけかな)気分になってしまう。キャラクターの存在感と描き分けが上手すぎる。アラレちゃんはだんだんと2頭身になっていくけれど第1巻の頃の3〜4頭身くらいのままでいてほしかったな。次はドラゴンボールにいくべきかどうか。

か。それとも他のジャンプ・コミックスかな。どんなのがあったかな。すっかり忘れてしまっている。

男塾や聖闘士星矢も愛蔵版や文庫版は多分まだあると思うのだけど、書店員時代に、こういういろんな判型のバージョンが出ているコミックスは検索がとても面倒だった記憶がある。「○○というコミックスの文庫版が全巻欲しい」というようなお客さまの問い合わせに対応するのに結構時間がかかってしまいお待たせすることが多かった。お待たせした上に文庫版の1巻とか2巻だけ切れてたりしてコンプリートできなかったり。

版元で紙の目録ってまだ作っていたりするのだろうか。あったら読みたい。

八月某日

ポンジューズ(株式会社えひめ飲料)がすきなだけでなく、歳のせいなのか味が濃く感じてしまうようになったので炭酸水で割ってみたらとてもうまい。氷を入れたグラスに先に炭酸水を入れてポンジューズを注いだ後に使い切れてなかった瓶付のシークワサー果汁を少し入れてみたらさらにすっきりでおいしい。いろいろとブレンドを試してみたい。

八月某日

岡山でライブが入ったのでライブ前日に東京へ。スタジオに向かう前に東京駅のトミカショップにてこどもへの土産を買っておく。ティガーのブルドーザーと、トヨタのハイエースを1台ずつ。トミカ、キリがない。

高円寺のスタジオに着いて、曲目を決めながら4時間の練習。仕事のつかれが抜けておらず明日の演奏が不安だったのでキュービークォワの錠剤でドーピングしておく。

練習後にメンバーの佐藤君宅へ泊まりに向かう前に1杯ひっかけてしまう。1杯どころか3杯になってしまったわけだがつかれているとわかっていながらやめられなかったものだから当然ながら酔ってしまった。酔いながらこんな量で酔ってしまうのかと加齢を感じてさみしくなる。水をたくさん飲んで酒を抜いてから眠る。

八月某日

青梅市在住のメンバー橋本君が車で迎えに来る予定時間の朝3時半。私も宿主の佐藤君もまだ眠ったままだった……。橋本君の電話で飛び起き、急いで車に乗り込む。酒は抜けてはいたが運転はしばらく橋本君に任せることとする。もう一人のメンバー杉浦君を高円寺で拾って高速度路へと向かう。運転する者以外は全員ひたすら眠る。

四人で運転を回したら思いのほか早く、正午過ぎには岡山に着くことができた。ホストの石原君にむかえてもらい久しぶりの再会を喜びあう。会場でカレーを食べたりリハーサルをしたり共演の方にご挨拶したり、宿にチェックインしたり、なんだかのんびりした良い時間を過ごす。熊本に帰る前くらいの頃、岡山に住んじやおうかなとおもったときもあつたほど岡山の街がすごく好きで数年ぶりに来れてとてもうれしい。

時期も時期なのでお客さんもそう多くは集まらず(時期が時期でも自分分のお客さんは少ないのですが)、返って密にならないくらいの感じでのんびり楽しめるいいパーティーだった。共演の方々の演奏は集中力があつてとても良かった。

軽く打ち上げてから宿へ向かったが、布団を敷く途中で眠ってしまったようで翌朝起きたら床の上だった。

八月某日

ライブ翌日、メンバーたちは石原君らとともに、昨年亡くなつてしまつた岡山のバンドマンのお墓参りへ向かう。僕はワイフが午後から仕事なので子守りのために早朝から帰熊となる。お墓の写真を送つてもらい写真に向かつて手を合わせた。次は行きます。

グreek版「ペールギュント」の齎したもの

秦阜 梅林

(楽人)

グreekが同邦、国民作家イブセンによる劇の為に書き卸した音楽は①劇中の登場人物達の姿や心理、そして場や情景の雰囲気を生き生きと見事に描写した計りでなく②言葉を超へた絶対的抽象として、劇を織らなひ言語や国、そして時代をも越へ多くの人々に物語を傳へる縁となり③更に其の「解り易く簡素で劇的な表現」は、彼の代表作と謳はれるやうになりイメージの乏しかった世界の人々にノルウェー許りでなく「北欧」の概念其ののさへ與ふる古典となった。

元々舞台に付随し、其れを補ふ…程度の意味合ひしか求められてゐなかつた音楽が「世界に知られる」作品となつた事で逆転の構図が生まれた。

何よりも此の音楽に潜んでゐる普遍性こそが、人間の根源的なイメージ、表現を促し、イラスト化された歌や響きは愛や憧れ、夢や冒険、それに郷愁を紡ぐ舞台装置と

なつて…狭ひ演劇や舞台から離れ人々の胸を直接打つやうになつた…

一

成る程イブセンの劇や戯曲も現在各国語に翻訳され識者の間では汎く読まれもしてゐる。しかしグreek版の音楽が世界の、しかも一般の人々に直接雄弁に語りかけ先程の逆転の構図が成立した背景には、皮肉にも「劇を、より効果的に解り易く傳へやう」と「決められた字数」と言ふか「制限」があり、そこをクリアしてゆく必然性の中作曲家に特別な創意工夫が為された故「かういふ作品になつた過程が偲はれる。

二

以下第一及び第二組曲のタイトルだけを列記してみやう…①朝②オーゼの死③アニトラの踊り④山の魔王の宮殿にて⑤花嫁の掠奪⑥イングリットの嘆き⑦アラビアの踊り⑧ペールギュントの帰郷⑨海外での嵐の夕⑩ソルヴェークの歌。

目

僕は敢えて此処にこれらの解題を記さなひ。其れは、この音楽が聴者の想像力、ファンタジーに直接響き合う性格のものだから：「え、どんな人が？ 死んだって…？ 掠奪って、穏やかぢや無いなあ…いったひ何が起こったの？ 山の魔王の…？ 何だって」かういった素朴な問ひに応へて生まれた物語、あなたなりの解釈が待望される世界こそが先述の逆転の構図を生んだ背景ではある。我が國で云ふと「吉四六伝説…」みたひな、ごくたわひも無い民間伝承、登場人物達の何気無ひ台詞や行動がいったひどんな物語を展開して行くのだらう…？

今回の一枚

E. グリーク「ペールギュント」第二／第二組曲 Op. 46
Op. 55 (1874/75, 88, 91)

- ① V. スメターチェク指揮ブラハ市立交響樂團
- ② O. フィエルスタート指揮ロンドン交響樂團
- ③ ネーメ・ヤルヴィ指揮エテボリー交響樂團
- ④ E. オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦樂團



私の問題意識

ナシヨナリズムと私

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

実は、国語の免許を取ろうとして勉強している。「国語」という単語自体からもわかるように、日本の「国」の「語」を学ぶ科目とされている。学習指導要領には、「我が国の言語文化」を学ぶとして、古典や書写、読書教育も規定されている。そのせいか、初めに想像していたより、「国」という言葉をよく見る。

教育がナシヨナリズムの形成の道具として近代に整えられたことを忘れてはいけない。そして、戦後教育が行き過ぎた愛国教育などの反省の上に立っていることも。

そんなふうを考えて、ふと思った。私が、ナシヨナリズムについて考え出したのは、いつからのことだろう。

最初のひとつのきっかけは、第二次韓流ブームと重なった私の中高時代の記憶だ。韓国ドラマが夕方に放送されるようになったり、K-POPのアルバムを買ったりしていた。

その一方で、さまざまな政治問題、歴史問題にも目がいくようになった。それを理由に、K-POPブームを冷ややかに見る「大人」の視線もあった。

文化では交流できても、政治での対立は終わらない。大人のように、ナシヨナリズムという大きな物語に巻き込まれたくはない。最初に意識し出したのは、そんな素朴な一少女の視線だった。

次に、改めてナシヨナリズムと向き合ったのは、大学時代の経験だった。国際教養学部という新しい学部にした私は、その浮ついた雰囲気の中で、多種多様な学友と四年間を過ごすことができた。

「英語で講義し、基本的に交換留学が必須」というこの学部は、大学の海外からの留学生を受け入れる大きな窓口のひとつだった。同じ日本人学生の中でも、日本で勉強するのは初めてという帰国子女、外国籍と日本国籍の両親から生まれたいわゆるハーフの人、地方出身で東京に出てきた人、ルーツは多岐にわたっていた。

そんな中で、大学の開催する日中韓交流キャンプに参加した私は、グラサンをかける友人に向かって「外人みたいだね」と言ってしまった。「外人だからね」といった彼は、中国の南京から日本に来ていた。

「日本人」とは何か考えるたびに、あの日に戻る。

交換留学では、自分が「外人」となった。ひよんなことから、私はトルコのイスタンブールで一年間過ごした。トルコは中東からの移民は多いものの、東アジアからの移民は少ない。私の見た目はとても目立つ。どんなに過ごしていても、私は透明になれない。住んで数ヶ月経っても、客引きはされるし、「日本人大好き」と声をかけられる。これが、トルコから飛行機で一時間かけて行けるような移民の多い欧州の国に行くと、全く起きない。場合によっては、最初に現地語で話しかけられ、英語で言い直されるということも起きたりする。最初、向こうは私を住人のひとりと思つて関わってくるのだ。

そんな経験から、トルコでの「外人」経験は、日本での「外人」経験と深く繋がっているのではないかと感じていた。いつまでも馴染めない「ヨソモノ」の感覚だ。

留学していた時、取っていた授業のひとつにトルコのナシヨナリズムについての授業があった。

トルコは近代に入り、イスラムの帝国から西洋的な国家への変革のため、「トルコ人」というアイデンティティを形成していった。その過程でイスラム教を公の場から締め

出しながらも、国民のアイデンティティとして重視し、ギリシャとの間でイスラム教徒とギリシャ正教徒の住民交換を行なった歴史などがある。その上、トルコでは、国旗や、共和国建国の父であるアタテュルクの写真が溢れていた。国旗を見ることが少ない日本とは全く違い、「国」への考え方の差を観察することができた。

卒業して、芸能事務所です仕事をしていた時、少し怖くなったのは、「国民的」人気を生み出す世界にいたことだった。仕事をしていると「国民的女優」とか「国宝級イケメン」という言葉を意識するようになる。果たしてその「国民」って誰なのだろう。

翻つて、学習指導要領で、「我が国」と名乗っている「我」とは誰のことなのだろう。押し付けられる大きな物語に抵抗しようとしていた一人だった私は、実はその大きな物語を与える側に無自覚になっているのかもしれない。ただ目の前にいる人の成長に関わりたいと教師の仕事を選んだだけだったのに。

そこで素朴に、分断への怒りを覚えた一少女の視線を忘れてはいけないと思ひ出す。そんなふうに生きていく一人であろうと思つた夏だった。

おむすびおにぎり

あきの素生

(くうねるめがね)



また新米の季節がやってくる。久しぶりに、身内の「今年は何袋買うか」という会話を耳にした。親戚が米を作っているの、毎年その米を買っている。九月末には、つやつやの新米にお目にかかれるだろう。

熱中症対策のひとつとして「塩むすび」を紹介するネットニュースが流れてきた。塩むすび、という文字を見て、ああ食べたいなあ、と唾を飲み込んだ。

おむすびはよく作る。いくつも作って凍らせておき、朝レンジで温めてから、昼食として職場に持っていく。そのおむすびは、仕事中の自分を少しでも鼓舞するため、炊き込みご飯や混ぜご飯にしていることが多い。豆ご飯、しょうがご飯、鶏肉の炊き込みご飯、カリカリ梅としらすとごまの混ぜご飯。自分の作ったお弁当は、作ってもらったも

のに比べて、おいしきとかわくわく感に乏しいものだが、ちよつと手の込んだおむすびは、それを少しだけ補ってくれる。

おむすび弁当を作り始めた頃は、ラップで包んだおむすびをそのまま凍らせていたが、シリコンのおむすびケースを見つけてからは、それにご飯を詰めて、ケースごと凍らせている。繰り返し使えるのがよいところ、でも、二つ食べるには少し大きく、一つだけだと少し寂しい大ききなのが玉に瑕だ。なので、ご飯をぎゅうぎゅうに詰めてケースぱんぱんのおむすびを作っている。ご飯を少なめに入れて、二つ持っていけばいいようなものだが、そうすると、たくさん作らないといけなくなるので、ものぐさな自分のために、ぎゅうぎゅうおむすびを選んでいる。

「おむすび」と「おにぎり」、どちらを使うことが多いかといえば、自分は「おむすび」のような気がする。地域差があるといわれつつ、その内容は調査によつてまちまちだったりするようだし、理由はわからない。おおらかな感じのする語感や、にぎっているときの(「にぎる」って言うてるけど)手のふつくらとしたようすが「おむすび」を選ばせるのだろうか。ただ、コンビニの商品は大概「おにぎり」と呼んでいる。これは、よく使うコンビニによるの

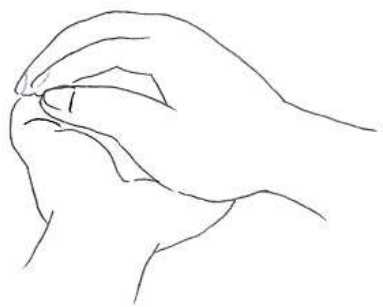
かもしれない。中学生になって、「コンビニのおにぎり」を買う機会が増えた。変わったフィルムに包まれたおにぎりは、少し大人になったような気分にさせてくれるものだった。当時、具はツナマヨ一択。家のおむすびは梅干か子持ち昆布が多かったので、具もまた日常とは違うと思わせてくれるものを好んだのだろう。フィルムをびりりと引つ張って、海苔の端っこが三角に取り残されるのを惜しみながら、少しひんやりとしたおにぎりにぱくつく。今では海苔が巻かれていないおこわや、もち麦入りのおにぎりなどを選ぶことが多くなったが、たまにぱりぱり海苔のおにぎりを選ぶと、なんだか懐かしい気持ちになる。

さて、日々ぎゅうぎゅうおむすびを食べている身ではあるが、塩むすびは断然ふわつとにぎったものもいい。塩とご飯だけのシンプルなおむすびがあんなにおいしいのは、あの、ふわっ、によるところが大きいんじゃないだろうか。あと、ご飯が温かいとなおよい。

思えばこれまでに、数えきれないほどの塩むすびを食べてきた。お弁当といえは、おむすびだった。遠足、運動会、何かの大会。お弁当箱には俵むすびが入っていた。学校が平日休みになった日のお昼、ご飯は、お皿にのったさんかくおむすびとおかず。朝早くから家族で出かけるときは、お

むすびとウインナーが詰め込まれた大きなタッパーを持って車に乗り、道道朝、ご飯を食べた。

塩むすびを作る。ご飯に塩をふりかけて、しゃもじで切るように混ぜる。手のひらにお塩をつけて作る塩むすびは何ともおいしそうだが、まんべんなく味を付けたくて、つい混ぜ込んでしまう。なるべく、ふわっ、となるように、でも、ばらばらに崩れてしまわないように、力を加減しながら慎重にぎる。できた塩むすびに味のついていない海苔を巻いて、大きな口ではおぼる。作ってもらおうおむすびにはどうしてもかなわないけれど、ご飯と塩と海苔だけで、じゅうぶんに幸せな気持ちになれる。



待ちぼうけ観察記

ドラメリア

(座敷わらし)



「近所に猫カフェができるらしい」という噂を耳にしたのは、まだ冬まったただ中のことだった。予定地は自宅最寄りのコンビニ跡。青緞のコンビニが閉店して以降ずっと空き店舗になっていた場所に、よその猫に心ゆくまで触れられる天国が。胸が高鳴る。

しかしこの天国、開店までの道のりは随分スローペースだった。猫カフェ(予定)は、のっぺり白く四角く背の低い「わたしは元コンビニです」という風情で立ち尽くしたまま、春を迎える。なんだ誤報だったのかと諦めの境地に達した四月。ようやく店名が掲げられた。壁に「CAT CAFE」と表記され、ちらりと上から覗く猫のイラスト。これは間違いないだろう。心がときめく。

風薫る五月。二次元の猫は一匹ぼつちで道路を見下ろしている。なんだか寂しそう、と思っていたら、六月には外壁のガラスに猫や草花のイラストが描かれはじめた。日に日に仲間が増えて賑やかになりこれは完成間近かと色めき立つが、そこからぶつとりと変化がなくなってしまう。ガラスに生い茂る楽しい草花がむなし。

八月。開店する気配のないまま夏休みも折り返しに差し掛かり、待ち続けたこちらにもくたびれてきた。どうなっているのか。まさかこのまま立ち消えなのか。期待だけさせておいて。だんだん八つ当たりに近い恨みがましさが湧いてきていたところに、先日ついに一枚の紙が貼り出された。

「ご心配をおかけしています。ゆつくり準備中、秋頃オープン予定です」

秋……！ 待つて待つて、待ち続けて。気がつけば季節は巡っている。夏が過ぎて、猫カフェの秋、猫まみれの秋が来るのだ。



・編集後記・

ピオーネ、クイーンニーナ、紅環……。ぶどう農園を営む親戚のおかげで、この時期は色々な品種を口にできます。皮ごと食べられるぶどうです。い発明だと思ふ。ドラメリア(編集長)

本誌でもワクサカさんが案内しますが、10月予定で『出セいかッ記』(仮)が河出書房新社で刊行予定。『ボンコツな冒険』の生活誌です。『ぶざける力』での数々の発見がいよいよ実践篇へと突入します。奈良敏行(発行人)